偽経『仏頂心陀羅尼経』の版行・石刻活動の演変

福田 素子

前言

『仏頂心陀羅尼経』はかつて一定程度流行したことのある仏典であり、別名『仏頂心大陀羅尼経』『仏頂心観世音菩薩陀羅尼経』とも言う。この経典は上中下の三巻に分かれているが、そのうちの下巻にある四つの霊験譚は、日本や中国の仏教霊験譚の成り立ちを考える上で貴重な材料となるものである。筆者もまた、討債鬼故事という中国の怪異譚の成立を考えるために、『仏頂心陀羅尼経』下巻第三話を研究の対象としてきた。しかし、この話の形成だけではなく、この仏典そのものの成立・流伝自体もまた、討債鬼故事[1]の受容を考える為に重要であると考えるようになった。そこで本論文ではこの仏典がどのように信仰されてきたのかを、現在各地に残されている版本や石刻拓本に付された題記によって考察したい。

一、『仏頂心陀羅尼経』とは

『仏頂心陀羅尼経』は、経録類に記載がなく、大蔵経などの叢書にも収録されていない、いわゆる偽経[2]に分類され

る経典である。そのため史書の記載も極めて少なく、残されている写本・刊本・石刻とそれらの題記がその性格や形成を知るための手がかりとなる。数多くのテキストが残存しているが、刊行された地域は中原の他に西域・朝鮮半島[3]・ベトナム[4]・日本[5]に広がり、刊行に使用された言語は漢語以外にウイグル語[6]・西夏語[7]・朝鮮語に及ぶ。

この経典に関して、最も多くの資料を調査し考証を加えたのは、鄭阿財『敦煌写本「仏頂心観世音菩薩大陀羅尼経」研究』（『敦煌学』二十三輯、二〇〇一）である。鄭阿財はこの論文において、敦煌写本・上海図書館蔵南宋残本・ロシア科学院東方学研究所サンクトペテルブルグ分院蔵西夏語及び漢文本・応県木塔遼代写本・房山石経金代刻経本・日本天理大学図書館蔵西夏語本・台湾故宮博物院蔵泥金字本・米国インディアナポリス博物館蔵明正統刊本・ロシア科学院東方学研究所サンクトペテルブルグ分院及びベルリントルファン文献センター分蔵ウイグル語本についてそれぞれ別個になされていた叙録をまとめ、敦煌本によって排印を行い、この経典を研究するための基礎を築いた。また、成立時期については敦煌写本の年代考証や下巻の第四話に現れる中国の地名の考証から中唐期と推定している。成立地点については、はじめの経典の紹介では「唐五代中原不傳，然西夏、遼、金多奉行信受而甚至流行，其後傳入中土，南宋、元代、明代民間則多所流傳」としているが、「當是唐代中土所產生的疑僞經」という記述もあり、中原・西域のいずれとも定め難いと考えているようである。

鄭阿財はこの経典の作者を不明としているが、西夏語のテキストについて紹介をしている西田龍雄は、『西夏王国の言語と文化』（岩波書店　一九九七）所収「西夏語仏典について」において、「経論法説沙門法戒」の名が訳者として付されているテキストの存在を指摘している。[8]この沙門法戒については、他の文献には全く見えず、本当にこの仏典の訳者といえるのかどうかも含め不詳である。

陳燕珠は『房山石経中遼末與金代刻経之研究』中の「遼金単本刻経之探討　三《仏頂心観世音菩薩大陀羅尼経》」において、この経典に智通訳『千眼千臂観世音菩薩陀羅尼神呪経』[9]或いは菩提流志訳『千手千眼観世音菩薩姥陀羅尼

身経』[10]の文章の一部が使われていることを指摘している。これはこの経典が両経典の成立より後の成立であることを示している。また房山石刻本と遼代の応県木塔から発見された版本の校勘を行い、房山石刻本が誤字脱字の少ない佳本であることを示している[11]。陳燕珠は経典名を挙げるに留まっているが、それぞれの経典の訳出年代は、『仏書解説大辞典』[12]によれば『千眼千臂観世音菩薩陀羅尼神呪経』が貞観元年から永徽四年（六二七～六五三）、『千手千眼観世音菩薩姥陀羅尼身経』は、訳者菩提流志の没年が、開元十五年（七二七）[13]であるから、『仏頂心陀羅尼経』の成立は早くとも七世紀後半以降であろうと考えられる。

『仏頂心陀羅尼経』の内容を改めて紹介すると、上巻には観音の発願と経典の功徳が説かれている。中巻には「陀羅尼秘字」を書いた紙を香水で呑み込んで難産や病気を治療する、という呪術に関する記述がある（これは道教の「符水治病[14]」を取り入れたものと思われる）。下巻には経典を信仰した人にいかなる功徳があったかについての、四つのエピソードが収められている。

第一、賓陀国で疫病が流行した際、観音菩薩が白衣の居士となって現れ、『仏頂心陀羅尼経』を人に請うて写経させ、心を込めて供養させて人々を救う。

第二、婆羅奈国のある長者の息子が十五歳の時に病気になり、隣の一長者が『仏頂心陀羅尼経』を写経するように勧めたため、閻王がこの息子の寿命を九十歳まで延長する。以上二つの故事は『千眼千臂観世音菩薩陀羅尼神呪経』に由来する。

第三、毒殺された者が、殺人者の生まれ変わりである女の子どもに何度も転生して復讐しようとするが、女が『仏頂心陀羅尼経』を信仰しているために遂げることが出来ない。ある日観音の化身である高僧に正体を現されて成仏させられる。女はいっそう信仰を強め、九十七歳の長寿を得た後に、「秦国の男子」に転生する。

第四、ある男が懐州の県令に任じられたが、路銀がないので泗州の普光寺に行って常住銭（寺院が経営する貸金業）の金を借りる。取り立ての為に普光寺の沙弥がついてくるが、男は金を返すのが嫌になったため、沙弥を袋につめて船から水中に投げ落とす。しかし沙弥は『仏頂心陀羅尼経』を信仰していたので、袋ごと空を飛んで懐州に先回りする。男は沙弥の姿を見て驚愕し、自らも『仏頂心陀羅尼経』に帰依したところ、経典の功徳によって勅命が下り、懐州の刺史に改められる。

筆者は二〇〇八年、「偽経『仏頂心陀羅尼経』的研究」[15]において、この経典の成立について考察した。鄭阿財は唐代のテキストは敦煌写本のみという前提で考察していたが、筆者は宋代の金石資料に唐代中原の『仏頂心陀羅尼経』石刻に関する記録[16]が複数現れることを指摘し、この経典が唐代の中原に既に存在していた可能性が高いことを示した。また、「討債鬼故事」と『仏頂心陀羅尼経』下巻の霊験譚の第三話との関連を考察した。さらに従来ほとんど本事考証の対象とならなかった第四話についても『日本霊異記』下巻第四話「沙門方広大乗を誦持し海に沈みて溺れざる縁」や劉斧『青瑣高議』後集巻四「陳叔文」といった類話があることを指摘した[17]。

二、『仏頂心陀羅尼経』の写経活動

1、文献に見える写経活動

現在、中国や台湾の仏寺や道観に詣でると、境内の隅に信者の寄進によって印刷された袖珍版の経典が山積みになっている光景がしばしば見られる。そこには『観音経（法華経普門品）』『仏頂尊勝陀羅尼経』のような正統の経典だけではなく、『父母恩重難報経』や『高王観世音』のような古くからある偽経や、信者自身が体験または見聞した神秘体験を書き綴ったパンフレットもあり[18]、参拝者はそこから自らの必要とする経典を無料で持ち帰ることができる

ようになっている。仏寺に道教経典が、道観に仏典が置かれているのは、勿論めずらしくない光景である。このような場が偽経を拡散し、または新しく生み出す場として機能している状況を見ることが出来るのであるが、このような場は果たして何時から存在したのだろうか。

そもそも「経典を写す」という信仰活動の淵源は、『唐大詔令』巻一一三所収の開元二年（七一四）七月の詔「断書経及鋳仏像勅」にうかがうことが出来る。

佛教者、在於清淨、存乎利益。今兩京城內、寺宇相望、凡欲歸依、足申化敬。下人淺近、不悟精微、覩葉希金、望餤思水、浸以流蕩、頗成蠹弊。如聞坊巷之內、開鋪寫經、公然鑄佛。口食酒肉、手漫擅腥、尊敬之道既虧、慢神之心遂起。百姓等或緣求福、因致饑寒、言念愚蒙、深用嗟悼。殊不知佛非在外、法本居心、近取諸身、道則不遠。溺於積習、實藉申明。自今已後、坊市等不得輒更鑄佛寫經典。須瞻仰尊容者、任就寺拜禮。須經典讀誦者、勤於寺讀。取如經本少、僧爲寫供。諸州觀竝准此。（開元二年七月）

（仏教とは、清浄な環境において利益があるものである。今、長安洛陽の城内では人々が帰依するに足るだけの寺院が建ち並んでいるのに、下賤の者は考えが浅く、木の葉を見ては金を欲しがり、炎を見ては水がほしいと思う。そのような心持ちに染まって流され、弊風が形作られている。聞くところによると、普通の町中に店を開いて写経や造仏が行われているそうである。酒やなまぐさものを口にし、手に触れては、尊崇の道は廃れ、神仏を軽んじる心が起こってくるものである。庶民はこのような者に福を求め、財産を失うに至る。その愚かさを思えば、憐れみを禁じ得ない。仏とはそもそも外にあるものではなく、法とは心にあるものであり、親しくこれを身につければ、道は遠いものではない。長年悪習に溺れているので、ここに申し渡すこととする。今より後は、街中で勝手に造仏や写経をしてはならない。仏の尊像を拝みたければ寺に行って参拝すればよく、経を読みたい者は寺で読むよう努めればよい。経

本が足りなければ、僧が写して供することだ。諸地方の観もこれに倣え。（開元二年七月）

この詔勅は、牧田諦亮の『疑経研究』において既に紹介されている。[19] 開元当時、全くの俗人が坊巷に店を開いて写経や造仏を行うことが行われていたのであろうと推測しており、筆者もそれに同意する。庶民から代金を取り、求められるままに、真経であれ偽経であれ写経していたと思われる。

『仏頂心陀羅尼経』本文中でも、しばしば写経の功徳が強調されている。短い経典の中で、写経についての記述が以下のように存在している。

①「若有慈順男子女人、欲報父母深恩者、遇見此佛頂心陀羅尼經文字章句、能請人書寫、受持讀誦、毎日於晨朝時向佛前、燒香誦念此陀羅尼經、如是之人終不墮於地獄中受罪（もし慈悲深く道理に従う男子女人がいて、父母の深い恩に報いようと欲し、この『仏頂心陀羅尼経』の文言章句に巡り合って人に書写してもらうことが出来、受持読誦し、毎日朝に仏前に向かい、焼香してこの陀羅尼経を唱えるならば、このような人々は終に地獄に落ちて罪を受けることが無いであろう。）（上巻）」

②「善男子善女人生我國中、護如眼睛、愛惜不已、此陀羅尼功德無量、何況有人聞見書寫受持供養、其福不可稱量（善男善女が我が国に生まれれば、我が眼のように大事に護り、愛惜してやまない。この陀羅尼の功徳は計り知れない。ましてこの経を聞き、所持して供養すれば、その福は計り知れない。）（上巻）」

③「若復有一切女人、厭女人身、欲得成男子身者、至到百年捨命之時、要往生西方淨土、蓮花化生者、當須請人書寫此陀羅尼經、安於佛前。（もしまたどんな女性でも、女性の身をいとうて男子に生まれ変わりたいと思ったならば、そして百歳で世を去った時に極楽往生して蓮の台に生まれたいと思ったならば、人に依頼してこの陀羅尼経を書写

させ、仏前にそなえるべきである）（上巻）」

④「復有善男子善女人、若得見聞此佛頂心自在王陀羅尼印、若書寫讀誦睹視者、彼人所有一切煩惱障閉。（またもし善男善女がいて、この仏頂心自在王陀羅尼印を見聞きすることが出来、もしも書写読誦し経を見ることが出来たならば、このような人の一切の煩悩は覆い隠されるだろう。）（上巻）」

⑤「又若復有人得遇善知識、故誘勸書此陀羅尼經上中下三卷、准大藏經中、具述此功德、如人造十二藏大尊經也（またもしある人が僧侶に遇って、この経典の写経を勧め、大蔵経中にある経典と同列のものとして扱い、その功徳を人々に説くようにさせることが出来れば、その人が受ける功徳は十二蔵の大尊経を作ったのと同じくらい、測り知れないものとなるであろう。）（中巻）」

⑥「令速請人盡寫此陀羅尼經三卷、盡心供養（速やかに人に頼んでこの陀羅尼経を写させ、心を込めて供養させた）（下巻第一話）」

⑦「卽開倉庫、珠金貨賣、更寫一千卷、日以供養不闕、當知此經不可稱量、具大神驗（そこで蔵を開き、珠や金を売り、更に一千巻の写経をし、毎日欠かさず供養をすれば、この経は計り知れない力を持っていて、大いなる神験を備えていることを知るだろう」（下巻第二話）」

⑧「貨賣衣裳、更請人寫一千卷、倍加受持、無時暫闕、年至九十七歲、捨命向秦國變成男子之身。（衣裳を売って更に人に依頼して一千巻を写させ、前に倍して受持供養し、片時も欠かさなかった。九十七歳の時に世を去って秦国〈中国〉の男子に転生した）（下巻第三話）」

⑨「若有善男子善女人、能寫此經三卷、…是人若住若臥危險之處、…無難不除（もし善男子善女人で、この経三巻を写すことが出来たならば、…このような人はもし危険なところに身を置いたとしても、…どんな災難でも除くことが出来る）（下巻第三話）」

⑩「破自己料錢、喚人只向廳前、抄寫一千卷、…後勅加改任懐州刺史（自ら銭を出して人を役所の前に呼び、一千巻を書写させた。…後に勅命が下り、改めて懐州刺史に任命された）（下巻第四話）」

このように、四千字程度の、それほど長くない経典の中に、繰り返し写経の功徳が説かれていることが分かる。自分の手で写経するだけでなく、①、⑥、⑦、⑧、⑩に見えるように、財貨を投じて人に写経をさせる功徳も合わせて強調されている。このことは、この経典が少なくとも開元二年の詔勅に見られるような写経産業の隆盛した状況下で生まれ、広められたものであることを示している。

宋代になると写経にも木版印刷が取り入れられるようになる。『夷堅志』には、版木を使って『仏頂心陀羅尼経』を印刷する話が残されている。『夷堅三志壬』巻六「蕭七仏経」を見てみよう。

饒州細民蕭七、居于雙碑下、能批炙猪肉片脯行賈、以取分毫之利、贍養妻子。慶元三年十月十九日晩市罷、歸家吃飯、洗足而請寢。至三更、忽厲聲喝、初無病疾、俄頃長逝。妻拊胸痛哭、不知所爲。後三日、隣巷黄婆夢白髪老人曰、蕭七因不合宍犯殤神、致掇死禍。黄婆曰、然則今當如何。老人曰、教他妻去柴主簿宅借『佛頂心經』請僧懺解乃可。黄寤。次日拂曉、走告其妻。詢柴宅、只在城隍廟背、素有此經板、求而得之、顧工印造千本、請兩僧看讀、又三日、蕭妻夢夫交話、歴歴如存、云已沾功果、將遂超生、悲訣而去。

（饒州の庶民蕭七は双碑の下に住んでいて、炙った豚肉を屋台で売り、少々の儲けを得て妻子を養っていた。慶元三年（一一九七）十月十九日の夜に商売を終え、家に帰って飯を食い、足を洗って寝た。真夜中に突然恐ろしい声を挙げ、これまで病気があったわけでもないのに、たちまち死んでしまった。妻は胸を打って泣き叫んだが、どうしていいか分からなかった。三日後、隣の巷の黄婆が夢で白髪の老人に会った。老人が、「蕭七はまずいことに殤神と出し

抜けにぶつかったため、死に到る災いを招いてしまったのだ」というのを聴いた。黄婆は、それでは今となってはどうしたら良いのかと尋ねた。老人は、蕭七の妻に柴主簿の家に行って『仏頂心経』を借りさせ、僧を招いて懺悔させれば良いと言った。黄は目を覚ますと、翌朝夜の明けるのを待って、蕭七の妻のもとへ走り、老人の言葉を告げた。柴の家を訊ねてみると、城隍廟の後ろにあってこの経の版木も持っていた。これを求めて工人を雇って千部印刷し、二人の僧を招いて読経させた。また三日後、蕭七の妻は夢で夫と語り合ったが、まるで本当に居るかのようであった。夫は、もう供養の功徳に浴したので、まもなく別人に生まれ変わるだろうと言い、別れを悲しみ去って行った。）

この話にある、柴主簿こそが、開元の詔に見える俗人写経業者の後裔であり、彼らは版木を所有していて、人の求めに応じて経の印刷を請け負ったのであろう。さて蕭七の妻は千部の経典を印刷したが、その経典はどのような者の手に渡ったのであろうか。『夷堅志』には他にも、「斉宜哥救母」（『夷堅三志己』巻四）という話がある。これは宜哥という六歳の少年が難産で苦しむ母を救うため、『仏頂心陀羅尼』と『九天生神章』[20]を手に入れて、暗誦して毎朝十回唱え、書き写したところ、母の産褥に神人たちが現れ、安らかに男児が生まれた、という話である。六歳児である宜哥が、大金を出してこれらの経典を買ったとは思えないので、おそらくは現在と同じく無料で配られているものを貰ってきたのであろう。なお、『蕭七仏経』中の柴主簿が城隍廟のそばに住んでいたことや、宜哥が『仏頂心陀羅尼』と一緒に道教経典である『九天生神章』を供養したことは、当時も現在と同じく、道教と仏教が庶民レベルではどちらも身近なものとして信仰されていたことを示している。

『夷堅志』の二つの話は、いずれもこのような経典への信仰を肯定的に捉えたものであったが、これを『金瓶梅』に見える写経活動の描写と比べてみよう。『金瓶梅』第五十七～五十九回では、薛姑子が西門慶と李瓶児に説いて彼等の子供官哥児のために『仏頂心陀羅尼経』を印刷するように勧めるくだりがある。その経過を詳しく追うと、以下

の通りになる。

五十七回において、王姑子の紹介で西門慶の家に入り込んだ薛姑子（王・薛ともに胡散臭い尼僧である）が、家門の繁栄のためにと説いて、西門慶から銀三十両を出させ、『陀羅経』五千巻を経坊に依頼することを請け負う（経費に不足があれば後日追加請求する、としている）。五十八回で、薛姑子は更に病弱な官哥児のために、李瓶児から銀五十五両を出させ、『仏頂心陀羅尼経』千五百部（綾の表紙のもの五百部・絹の表紙のもの千部）の印刷を経舗（五十七回では「経坊」になっている）に取りつぎ、八月十五日に東嶽廟で供養することを請け負う。五十九回で李瓶児依頼分は刷り上がるが（先の西門慶依頼分がどうなったのかは分からない）、官哥児は却って死んでしまう。すると薛姑子は、『仏頂心陀羅尼経』の下巻第三話の話を引いて、官哥児は李瓶児の前世の債主かも知れない、この経の功徳で前世の仇敵を退けることが出来のだと、ご都合主義的な言い訳をするのである。

五十九回では王姑子と薛姑子が請負料の配分を巡って喧嘩になっていることから[21]、夫妻の払った金のうち、かなりの額が経舗に渡らず、仲介者らに着服されていると思われる。『金瓶梅』では開元二年の詔で言及されていたような、写経ビジネスの汚い側面が描き出されている。『夷堅志』では『仏頂心陀羅尼経』の存在を黄婆に教えたのは、夢にあらわれた神のごとき人であった。『金瓶梅』のエピソードは、同じ行為を職業としておこなう者の存在があったことを示している。

2、版本に見る『仏頂心陀羅尼経』の信仰形態

前章では、小説などに描写された『仏頂心陀羅尼経』印刷の模様を紹介した。それでは、彼らが印刷した「実物」は、一体どのようなものだったのだろうか。

現在『仏頂心陀羅尼経』版本は中国・日本・韓国・ベトナム・アメリカ・フランス・ロシアなど各地の図書館や博

物館に所蔵されている。これらの版本の中には、末尾に寄進者による題記があるものがあり、寄進者の姓名や身分などを知ることが出来る。それらのうち、寄進者の祈願の内容が詳しく書かれているものを取り上げ、その信仰のあり方を考えたい。まずは、宋代のもの二点を挙げる。一九五九年第十期『文物』「文物工作報導」で紹介された嘉祐八年（一〇六三）の『佛頂心陀羅尼經』版本[22]と、浙江省博物館蔵『南宋佛頂心陀羅尼經』版本[23]の題記である。以下はそれぞれの図版を元にした録文である。

※①、②とも改行・空白は原文の通り。判読不能の場合、文字数が分かる場合は「□」で、文字数も分からない場合は「…（判読不能）…」とした。

①『佛頂心陀羅尼經』版本（嘉祐八年）

虔州贛県孝仁坊清信弟子任士衡及妻干氏三娘
同發丹心印造佛頂心觀世音菩薩大陁羅尼経五
百卷意者伏為長養男女多有[?][24]寿切慮夫妻年
命□□又恐前世今生悪業債主冤家是致長養男
女無成頻多災害所有冤家仗此
佛頂心觀世音菩薩大陁羅尼経各相解釈冤家債
主…（判読不能）…
（一行判読不能）
…大宋嘉祐八年歳次癸卯正月一日謹題

（虔州贛県孝仁坊清信弟子任士衡と妻干氏三娘は同じく丹心を発して『仏頂心観世音菩薩大陀羅尼経』五百巻を印刷いたします。願うところは、養うところの息子や娘が［？］寿をさずかるように、また夫妻の年命の□□を切に願い、前世や今生で作った悪業の債主冤家が災いして、養うところの息子や娘が成長せず、多くの災禍に見舞われることを恐れます。

すべての冤家債主はこの『仏頂心観世音菩薩大陀羅尼経』によって、それぞれの恨みを解き…

大宋嘉祐八年（一〇六三）癸卯の年正月一日謹みて題す[25]）

②『南宋佛頂心陁羅尼經』（乾道八年）

處州麗水縣奉 三寶弟子葉岳同妻王氏卞
五娘昨為日前雖有男女類皆夭喪竊恐前
生造諸惡業有此□難謹發誠心印造
佛頂心陁羅尼經壹□卷遍施□持（または特）
早遂願心及乞追葉□□男竹僧託生浄土伏
□□印知
乾道八年壬辰二月奉佛□…（判読不能）…□葉岳謹□

（処州麗水県の仏弟子葉岳とその妻王氏・卞五娘は、かつて息子や娘をもちましたが、みな早死にしてしまいました。竊かに恐れるのは、前世で悪業を犯したため、このような難儀に遭うのではないかということです。謹んで真心を発

して『仏頂心陀羅尼経』一□巻を印刷してあまねく施し、受持させ、速やかにこの願意を遂げるとともに、葉岳の息子竹僧の極楽往生を願い…
乾道八年壬辰（一一七二）二月奉佛□…□葉岳謹みて□す）

①は、虔州贛県の孝仁坊在住の任氏夫妻が自分たち夫妻とその子供たちのために、長寿と「前世今生の債主冤家が復讐に来ないこと」を祈って『仏頂心陀羅尼経』を大量に印刷する願文である。経典中で「前世今生悪業債主冤家」について触れているのは、下巻第三則の故事のみであり、願文を書いた彼らの念頭には、この前世の仇が我が子に転生する話が念頭にあったと考えられる。

一方②は、乾道八年（一一七二）に処州麗水県（現在の浙江省麗水市。福建省との境）の仏教徒葉岳とその妻王氏、卞五娘（続柄不明）の寄進によって出版されたものである。彼らには何人か男女の子供が生まれたが、みな幼くして死んでしまったようである。この題記では、①に比べると結びつけ方が漠然としているが、我が子が次々と早死にすることが前世の悪行の報いなのではないか、という不安が表明されている。

上記二つは、夫妻が願主となって印刷させた版本であるが、そのような例は他にも北京国家図書館蔵・鄭振鐸旧蔵の、承議郎石処道とその妻梁氏による崇寧元年（一一〇二）刊本（〇四九二七）や、浙江省博物館蔵の、尤道澄とその妻王氏による元刊本[26]がある。これらはいずれも夫妻連名の題記があり、子孫の繁栄を祈る言葉が記されている。

鄭阿財の論文に著録がある、米国インディアナポリス博物館蔵明正統五年（一四四〇）刊本（女性が娘の安産を祈願して一千部印刷[27]）や、佛教大学所蔵の徳妃張氏[28]による嘉靖三十六（一五五七）年刊本[29]のような例もあるので百パーセントとは言えないが、夫婦連名の割合が多いことは目を引く点である。また、自分より上の世代の死者の冥福を祈る、というよりは、未来の子孫繁栄（そして幼くして死んだ我が子の成仏）を願うために寄進を行う傾向が見てとれ

る。

さて、現在分かっている内で、一番新しい（刊行時期については後に詳述）『仏頂心陀羅尼経』版本は東京都立図書館蔵の『佛頂心經三卷』（田中乾郎文庫　特七八一三）である。以下に題記を掲げる。（改行・空白は原文の通り）。

③『佛頂心經三卷』（田中乾郎文庫　特七八一三）

北平弟子朱善慶病愈事左發願出貲付梓敬重刻
佛頂心陀羅尼經刷印流傳天下藉消夙世惡業並仰答
神麻恭為 先考妣[30]同登極樂猶望亡妻王馮二氏早得超昇尚祈
　　現在未來人口平安如意福壽綿長是則切祝持此經
　　者務須虔誠供奉靈感異常切勿放在穢污處因有
諸佛菩薩聖像尤宜敬重萬毋褻瀆恐遭譴責陳慎之慎之
　　富文斎刻

（北平の仏弟子朱善慶の病気平癒を祈り、寄進をして『仏頂心陀羅尼経』を重刻し、印刷して天下に流布させます。これによって前世の悪業を消し、また神の加護に答え、つつしんで亡き両親がともに極楽往生し、先だった妻王氏馮氏の二人が成仏することを願います。現在未来の人間が平穏無事で不自由なく、長寿でありますよう祈ります。これはまさに切に祈るところであります。この経を所持するものは、必ず敬虔に、感覚を研ぎ澄ませて大切に扱わねばならない。決して経典を不浄な場所に放置してはならない。諸仏菩薩の像は、とりわけ敬重されるべきだからである。

万が一にも汚してはならない。さもなければ譴責を受けるであろう。慎むべし、慎むべし。

富文斎刻）

亡き父母や先だった妻たちの冥福と、未来の子孫たちの幸福の両方を祈って印刷された版本である。願主は「北平弟子」を名乗っている。北京が北平と呼ばれていた時期は、二度あるが、一度目は明建国～永楽元年の間（一三六八～一四〇三）、いま一度は、辛亥革命後の民国十七年（一九二八）に北平特別市に改められてから、十九年（一九三〇）に北平市となり、二十六年（一九三七）に北京市に戻されるまでである。また「富文斎」については、この名前を持つ書肆が、民国十五年に江寧鄧之誠撰の『骨董瑣記』[31]という書物の販売をしている。この二点を合わせると、所蔵者である都立図書館は清本としているが、この版本は民国十七年（一九二八）から二十六年（一九三七）の間に印刷されたと見る方が妥当であろう。何かの祈願のために寄進し、『仏頂心陀羅尼経』を印刷することは、少なくとも民国期までは行われていたことが分かる。経本を粗末にしてはならないという末尾の戒めは、宋代や元代の写本には見られないもので、信仰心の変化を見る上で興味深い。

三、台湾中央研究院傅斯年図書館と北京国家図書館の拓本に見る金代の石刻群

筆者はグローバルＣＯＥ「死生学の展開と組織化」の若手研究者支援を受けて、二〇一二年一月に台湾中央研究院傅斯年図書館に赴き、金代の『仏頂心陀羅尼経』石刻拓本を調査した。同図書館蔵の『仏頂心陀羅尼経』石刻拓本は、河北省淶水県とその周辺のものに集中していた。その後、北京国家図書館にも、同じエリアの石刻群からとった拓本が残され、『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本匯編』（以下『北京』と略）に掲載されていることが分かった。そのうちのいくつかは、傅斯年図書館蔵のものと同じ石からとられたものであった。傅斯年図書館蔵の拓本はかすれが少なく

判読しやすいが、『北京』所収の図版は、拓本そのものがかすれている上に写真もあまり良くないため、『北京』だけにしか図版のないものはいずれも判読不能である。従って、以下では傅斯年図書館に拓本があったものと、傅斯年図書館の拓本を参考にして判読出来た『北京』の図版を用いて考察を行う。今回対象とする石刻拓本は以下の六点である。

①傅斯年図書館蔵『金大佛寺經幢』（T六一三：六三／四〇二四）大定二十三（一一八三）年（『北京』版あり）
②傅斯年図書館蔵『金陀羅尼經幢』（T六一三：六三／七三六七）明昌二（一一九一）年（『北京』版あり）
③『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本匯編（遼金西夏三）』第四七冊十七頁「李興仁及僧妙浄建陀羅尼幢記」葉二四六　明昌三（一一九二年）
④傅斯年図書館蔵『金觀音庵佛頂心陀羅尼經幢』（T六一三：六三／四六〇〇）泰和元年（一二〇一年）（『北京』版あり）
⑤傅斯年図書館蔵『金昶公法師壽塔記』（T六五四：六三）大安二（一二一〇）年（『北京』版あり）
⑥傅斯年図書館蔵『金佛頂心陀羅尼經幢』（T六一三：六三／二五一三）大安二（一二一〇）年（『北京』版あり）

①から⑥までの石刻は、形態としては全て経幢という形式をとる。経幢とは、『望月仏教大辞典』[32]「經幢」の項（六一〇～一頁）によれば、「経文を刻せる石柱。又石幢とも云ふ。多角形の石柱に経文を刻せるものにして、八角形のもの最も多し」とある。また経幢に刻される経典は『仏頂尊勝陀羅尼経』が最も多く、それはその経典の内容に「高幢」に書写して安置することを勧めるからであるという。

『仏頂尊勝陀羅尼経』は、天竺僧仏陀波利漢訳。梵語のテキストもあり、代々の大蔵経にも入っている正統の経典

である（大正大蔵経では第十九冊 三四九頁a～三五二頁c）。『仏頂心陀羅尼経』と名前は似ているものの、『仏頂尊勝陀羅尼経』が『仏頂心陀羅尼経』として記録されている例（またその逆）は管見の限り無く、両者は古くから区別されていたと考えられる。なお経幢の現存例には、『仏頂尊勝陀羅尼経』を刻したものが圧倒的に多数を占め、『仏頂心陀羅尼経』のものは、これに比べれば少数派である。

また経幢の流行した時期は、平凡社『世界大百科事典』[33]「経幢」の項（三四九頁）よると、唐代に建立がはじまり、宋・遼代に盛行、その後は衰える、とある。金代のこれらの経幢は、その流行の末期に位置することになる。金は、一一一四年に完顔阿骨打が建国、一一二五年に遼を、一一二七年に北宋を滅ぼすが、一二〇六年に建国したモンゴルに圧迫され、一二一五年には中都を奪われ、一二三四年に滅んでいる。これらの石刻の建立は一一八三年から一二一〇年の間に集中しており、金の治世の比較的平和な時代に作られたことになる。

その録文は以下の通り。なお、これらの碑文はいずれも『全遼金文』[34]に未収のものである。

※改行・空白は原文の通り。字があっても判読不能の場合、文字数が分かる場合は「□」で、文字数も分からない場合は「…（判読不能）…」とした。傍線は後の論述のために筆者が附した。

①傅斯年図書館蔵『金大佛寺經幢』（T六一三、六三二／四〇二四）大定二十三年（一一八三）

（仏画）

佛頂心羅陁尼經

（漢文陀羅尼・録文省略）

大金国中都易州淶水縣累子里李温　奉為

亡過父母建立 佛頂心陀羅尼石塔之記
夫佛頂心陀羅尼者　諸佛宣説不可思議塵霑影覆皆得生天　伏願
此祖先靈承此據因　常蒙金色之光永受無生之樂
耶　李端妻傅氏　弟李瞻　妻龐氏　房弟李金妻魏氏女王郎婦
父端妻傅氏長男　温妻龐　出家僧佉樞　温婦女劉郎婦　女婿李祥[35]妻刘（ママ）氏
小女傅郎婦祥劉氏長男長壽次男[?][36]住 長男長壽妻白氏婦女杜郎婦
大定二十三年十一月二十九日 建

●傅斯年図書館蔵拓本欄外に、「來水両廿里檀山大佛寺」とある。
●繆荃孫撰『芸風堂金石文字目[37]』巻十四に「淶水縣累子里李溫為亡父母造陀羅尼經幢」として、呉式芬撰『金石彙目分編[38]』巻三補遺易州「金淶水縣累子里李溫為亡父母造陀羅尼經幢」として記載。
●『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本匯編（遼金西夏三）』第四六冊「李温陀羅尼経幢　葉二三三」　一六九頁

②傅斯年図書館蔵『金陀羅尼經幢』（T六一三：六三／七三六七）明昌二年（一一九一）

佛頂心羅陁尼
（漢文陀羅尼・録文省略）
大金中都易州易縣北王（または主）鄉白馬里□□□□
奉為亡父母特建佛頂心陁羅尼幢記

先亡耶耶任諱不知妻□氏男二人女二人
亡父任□安母柴氏　男二人長曰任子琪
妻趙氏孫龜田妻李氏女一人巧□次男曰
任子忠妻□氏□男三人長曰□□次曰醜
和尚小曰定醜女二人長曰梁郎婦小住仙
小男任子璋妻刘（ママ）氏孫男永和妻張氏女□
長□刘（ママ）□婦小曰周郎婦　涞陽趙奉先造
明昌二年辛亥歳　辛壬月酉日次男任子忠書

●欄外に「易州北十二里白馬林」とある。
●『芸風堂金石文字目』巻十四に「任□□為亡父母造陀羅尼經幢」として記載。
●『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本匯編（遼金西夏三）』第四七冊「任子琪建陀羅尼幢記　葉二四四」十四頁

③『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本匯編（遼金西夏三）』第四七冊十七頁「李興仁及僧妙浄建陀羅尼幢記」葉二四六　明昌三年（一一九二）

佛頂心羅陁尼真言曰
（漢文陀羅尼・録文省略）
夫佛頂心陀羅尼者　諸佛宜（または宣）説不可思議

…（判読不能）…　皆得生天　伏願上祖先
承此　…（判読不能）…　之光受無生之□
大金中都易州淶水縣累子村姪李興仁並尼女　妙浄
奉為亡父建立陁羅尼幢一坐
宗耶耶李貞　妻田氏　次妻馬氏　長男二人
長男李欽　妻龐氏　弟李琛　妻王氏
男二人　長男李興仁　妻張氏　弟李興俊
妻龐氏　女二人　大　女尼妙浄　次女龐郎婦
孫□三人　長孫李佰均　妻龐氏　次孫李佰元
妻張氏　次孫舎児　孫女白姑　重孫猪児　女伶姑
明昌三年閏二月十一日姪李興仁　並尼女妙浄　建
…（判読不能）…　…沙門　浄秀書　趙奉先□

●傅斯年図書館に『金忠□校尉李貞墓幢記』という石刻拓本が所蔵されており、これは同じ供養者集団により同年同日に建立されたものであるが、内容は『仏頂心陀羅尼経』ではない。家族の名の解読には、この拓本を多く参考にした。

●『芸風堂金石文字目』巻十四に「淶水縣累子村李興仁造陀羅尼經幢」として、『金石彙目分編』巻三補遺易州に「金淶水縣累子村李興仁造陀羅尼經幢」として記載。

④傅斯年図書館蔵『金觀音庵佛頂心陀羅尼經幢』（T六一三：六三／四六〇〇）泰和元年（一二〇一）

（仏画）

佛頂心羅陁尼

（梵文陀羅尼・録文省略）

大金中都易州淶水縣石龜里校尉釗公壽塔記
隱君子釗公壽民乃本里之居人也父□公亮母
盧氏公為人耿界倜儻不群氣識宏遠襟量豁如
平日治家廉儉為度貞孝為心勤□農業五十年
間家傳餘慶凡百如意資産尤足戸門□華迨承
安二年中年八十有四**歳**以鄕老特蒙
國恩受賜進義校尉有妻楊氏體白淑美舉止異
常能閑鞠育之理不幸於承安二年十月十八日因
微疾而卒矣壽年八十有四也孝男彦璋念父壽高八十
有七**歳**身體猶建耳目尚明故孔聖有言曰父母之
年不可不知一則一喜一則一惧預備不虞以發敬心
特命良工建斯壽塔伏願生者延生亡者入聖為之
銘曰　淶陽邑北　石龜之峯　峯下故里
天物蔥蔥　東沿柳岸　西接梵宮　南**攜**長峯

仙洞雲生　北流勝水　魚躍龍昇　煙霞掩□
草木欣榮　化出逸士　本祖彭城　卜居々隱
子孫詵詵　尚□之処　異曰必臻　長男彦璋妻
藺氏次男彦昌妻竇氏姐王郎婦次女蔡郎婦孫五人…（判読不能）…
胤妻蔡氏次昌孫妻李氏次□孫次□孫幼添兒孫女五人楊郎
婦次谷郎婦次蔡郎婦次鄭郎婦□定仙里孫女金容
泰和元年四月十八日丁酉丙時建立

●拓本欄外に「淶水北十八里石巠村觀音菴」とある。
●『金石彙目分編』巻三補遺易州に「金石龜里釗公壽塔記幢」として記載。
●『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本匯編（遼金西夏三）』第四七冊「劉民壽塔幢　葉二五六」六二頁
●承安二年は一一九七年。彭城は現在の徐州。

⑤傅斯年図書館蔵『金昶公法師壽塔記』（T六五四．六三）大安二年（一二一〇）

昶公法師
壽塔之記（寺院の扉と思われる絵）
大金易州延慶寺昶公法師壽塔記
夫生死常理何足噫□？[39]

師諱思昶白馬里人也父李見母石氏家世純
善師幼不茹葷不兒戲父母遂放令出家禮本
州延慶寺普安大德為師訓以今名讀習經業
至定十七年中選受具戒尒後遍暦講肆深通
奥旨不數年本村堅請開大花嚴經講至今三
十餘載如一日方以六旬自思人生何定終不
免最後一朝遂竭誠預造壽塔一坐置於白馬
義井院西南隅終為後代軌矦
佛頂心陁羅尼
（漢文陀羅尼・録文省略）
門□五人曰善義善温善企善柔善仁
姪男李貴李資全
大安二年五月二十九日建浹陽田慶刊

●『芸風堂金石文字目』巻十四に「昶公法師壽塔記」として記載。
●『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本匯編（遼金西夏三）』第四七冊一一三頁「思昶壽塔幢」葉二七一

⑥傅斯年図書館蔵『金佛頂心陀羅尼經幢』（T六一三．六三／二五一三）大安二年（一二一〇）

佛頂心陀羅尼
（梵文陀羅尼・録文省略）
大金中都易州來水縣□□鄉新村□□
王建忠為亡兄特建□塔一坐[?][40]　姪胤同立
兄忠璋妻劉氏長男王胤妻楊氏
長女郝郎婦長孫彦暉　孫女黒□姑
建忠妻成氏長二男長王志妻劉氏次越醜長一女
郝郎婦大安二年十一月初一日立
（仏像レリーフ）

●『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本匯編（遼金西夏三）』第四七冊「王建忠建陀羅尼経幢　各一〇二九九」一一六頁

造立の目的からこれらの石刻を分類すると、①②③⑥が、亡父母または亡兄、つまり死者の供養のために建てられたのに対して、④と⑤は「寿塔（生前に建てる墓）」を建立する際に、経緯を説明する文章「寿塔記」を刻したものである。④では、子供たちが高齢の父の健康と長寿を祈って、⑤では老い先短いことを自覚した高齢の僧が、「後代の軌（後代の人々のよるべき道）」とするために自ら造立し、甥と門弟が寿塔記を書いている。（⑤の碑文によれば昶

公法師は『華厳経』を講じるひとかどの学僧であったのに、自らの寿塔に偽経の『仏頂心陀羅尼経』が刻まれることを許している点は面白い）。建立の参加者は、①②③④⑥では被供養者を父・祖父・曾祖父とする者で構成され、⑤の門弟と甥を含め、供養される者から見れば目下のものとなる。リーダーは多くの場合被供養者の息子（必ずしも長男とは限らない。例は②）がつとめるが、⑥のように兄弟が音頭を取っている例もあり、この場合は被供養者の子供が年齢的に不足していたものと思われる。また、参加者は男子子孫とその配偶者には限られず、未婚でまだ生家に残っている女性や、既に他家へ嫁した女性（「〇郎婦」の形で記されている）も多く名を連ねている。滋賀秀三『中国家族法の原理』によれば、「女性は自己の父を祭る資格を有しない」ものであった。未婚のうちは誰を祭る資格をも持たず、必ず他家へ嫁ぎ、嫁ぎ先の祭祀を受けるものであった[41]。また、③では出家した娘（尼女妙浄）が発起人の一人となり、⑤では若くして仏僧となり、家を離れた者の寿塔を建てることに、血縁者である甥が参加している。他にも①では、「出家僧佉樞」というものが造碑の参加者の一人として名を連ねている。婚姻や出家などで生家を出た人間にも、造碑の対象となったり、参加したりする資格があったことは伝統的な祭祖との大きな違いであり、注目に値するものである。

造碑について、これらの碑文から注目されるのは、②と③に同じ趙奉先という人物が関わっていることである。彼と碑文に見える他のメンバーとの間に血縁関係の記述が無いことから、これは塔を建てた石屋か、その取り次ぎの人物ではないかと思われる。そして①と③では大変よく似た経典をたたえる文章（夫佛頂心陁羅尼者諸佛宣（または宜）説不可思議塵霑影覆皆得生天[42]…）が見られることから、このような業者は依頼者の為にある程度テンプレートのようなものを用意していたのではないかと推測される。これは経典の印刷のための版木があらかじめ用意されていたのと同じ状況であろう。

また、『仏頂心陀羅尼経』は、おそらくは中国で撰述された経典であるが、これら金代の石刻ではしばしば梵文に

よる陀羅尼が刻されている。紙の版本ではこのような梵文陀羅尼は全く見られない。この梵文がどこまで「正しい」のかは不明である。

なお、金代の『仏頂心陀羅尼経』テキストには、他に房山石刻のものもある。[43] 房山のものは陀羅尼だけではなく全文が刻されており、経幢形式ではなく、横に長い薄い石版に刻されており、房山石刻大蔵経と同じ体裁をとっている。「塔下八九六九～」のものには

施主奉聖州住人李阿安為生身父母及
法界含霊[?][44]造此陁羅尼経碑
皇統三年七月十三日成造書鐫　記

という題記がある（改行・空白は原文の通り）。奉聖州は『遼史』巻四十一「地理志五　西京道」によれば唐代の新州（現在の張家口市）にあたる。金の大安元年（一〇八五）に徳興府に編入された（『金史』巻二十四　地理志上　西京路　徳興府）。皇統三年は一一四三年であるから、旧地名がまだ使われていたことになる。この碑文では寄進者は一人で、祈願の対象は「生身父母」と「法界含霊」であり、淶水県の経幢とはまた違う傾向が見て取れる。淶水県の経幢が奉納者にとっての地元に建てられているのに対して、房山は一種の聖地であり、込められる祈願にも違いが生じているのかもしれない。

『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本匯編』を見ると、石刻の『仏頂心陀羅尼経』は金代にしか見出すことが出来ない。宋代と明代は『仏頂心陀羅尼経』の印刷が盛んに行われていたが、石刻の例はいまのところ発見されていない。「一、『仏頂心陀羅尼経』とは」で挙げた通り、唐代にいくつかの石刻があったと思われるほか、北京法源寺に遼代の経幢

残石[45]があり、『全遼文』にも「鄭□造陁羅尼幢記　大安二年[46]」が記載されているため、石刻は金代だけの現象であるとは言えないが、遺されている石刻の量から考えれば、金代に比較的流行していたことは確かであろう。

四、まとめ

『仏頂心陀羅尼経』は、経典を大量に写すことの功徳を本文の中で強調していた。その結果、多くの版本と石刻が残されることになった。

紙に印刷されたものは、夫妻連名の寄進が多く、未来の子孫の繁栄が祈念されることが多い。その中には自ら身に覚えのない前世の悪業が、子供に害を及ぼし、子を早死にさせるかもしれないという不安が表明されているものがある。『仏頂心陀羅尼経』の中で、前世の悪業が子供の夭折をもたらすという記述があるのは、下巻第三話の箇所のみである。『仏頂心陀羅尼経』下巻第三話には借金の取り立てという要素は無いものの、『金瓶梅』第五十九回において薛姑子はこの話を李瓶児に語り聞かせたあと、「你這兒子、必是宿世冤家、托來你蔭下、化目化財、要惱害你身（あなたのこの子供〈官哥児〉は必ずや前世の仇で、あなたのもとに生まれ変わって来て財産を浪費し、あなたの身を苦しめるつもりだったのでしょう）」と、この話にはもともと含まれていない散財の話を付け加えている。このことから『仏頂心陀羅尼経』は、下巻第三話を介して、この話から少し遅れて成立する討債鬼故事と結びつき、その流布に伴い、討債鬼の害を防ぐものとして信仰され、大量に印刷されたのである。

一方石刻は、自分より目上の者（生死に関わらず）のために建てられることが殆どである。死者の成仏は『仏頂心陀羅尼経』の本文に挙げられた様々な功徳のうちの一つであるが、紙に印刷する場合とは異なる祈願が選択されているのである。このたび筆者はまとまった量の『仏頂心陀羅尼経』石刻拓本を調査する機会を得て、石刻に込められた祈願は、本来の目的である討債鬼故事研究とは直接関わりのないものであることを知った。しかし今回の調査によっ

て、版本と石刻では『仏頂心陀羅尼経』が持つ機能に大きな違いのあることに加え、さらに一つの興味深い事実を発見することが出来た。それは、これから結婚して生家を出る女性、既に結婚して生家を離れた女性、出家者のように、伝統的な祭祖では資格外とされるメンバーが多数造碑に参加していることである。唐代の文言小説に始まり、現代の小説まで、中国の文芸作品における討債鬼故事は、ほぼ完全に父と息子の物語である。『仏頂心陀羅尼経』下巻第三話のように、その前段階では前世の敵に苦しめられる母親の話が存在していたにもかかわらず、「奪われた金を取り戻す」という要素が加わった途端、母親の姿は物語の中から消え去ってしまう。前世の負債を請求されるのは父、取り返すものは息子という物語のみが繰り返し語られるのである。[47] ここには一族の「気」は財産と共に、父から息子へ引き継がれるとする男系中心の家族観があるであろう。しかし宋代の版本題記や『金瓶梅』の李瓶児の例に見たように、『仏頂心陀羅尼経』が討債鬼撃退のために印刷されるようになった後も、多くの女性がその版行に携わっているのである。『仏頂心陀羅尼経』の石刻は、少なくとも金代のある地域には、伝統とは大いに異なる家族観や信仰が存在していたことをうかがわせる。それらの実情を知ることは、文芸作品のみからは見えてこない討債鬼故事、女性にとっての討債鬼故事を考えることとも繋がって来るものと思われる。今後も『仏頂心陀羅尼経』信仰の実態について研究を続けたい。

（注）

（1） 討債鬼故事は、AがBから借りた金を踏み倒し（あるいはAがBから金を奪い）、そのためBは死後A（又はAの生まれ変わり）の子供に転生し、親の財産を浪費し、Aが奪った金額まで使い切ったところで死亡するという話である。概要については拙稿「鬼討債説話の成立と展開―我が子が債鬼であることの発見―」『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第九号（二〇〇六） 二十三

〜四十七頁を参照。ただしこの論文では、本稿で取り上げた『仏頂心陀羅尼経』下巻第三話のように、被害者が加害者の子供に転生して復讐するが、金銭の取り立てを含まない話をも討債鬼故事として論じていた。本稿においては討債鬼故事を「金を奪われた被害者の霊が借金を取り返しに来る」「被害者が加害者の子供に転生する」という二つの要素を持つものと定義する。『仏頂心陀羅尼経』下巻第三話とその類話（前述の拙稿では「阿足師型討債鬼故事」と呼んだ）は、討債鬼故事成立の前段階にある作品であると見解を改める。討債鬼故事の成立過程については、「六朝・唐代小説中の転生復讐譚―討債鬼故事の出現まで」（『東方学』第一一五輯二〇〇八）三十七〜五十四頁を参照のこと。

（2）偽経は疑経とも言う。インドの原典から翻訳されたのではない仏典を指す語で、偽経は六朝以来の代々の経録の編纂において排除の対象となってきた。どの経典をもって偽経とするかについては経録編纂者により見解が分かれる場合がある。内容は、中国人僧の撰述による教理研究書から、民間信仰の要請から作成された呪術的なものまで、多岐にわたる。上記のまとめは牧田諦亮『疑経研究』（京都大学人文科学研究所　一九七六）第一章による。

（3）東京大学所蔵C四〇－一七五二阿など多数。

（4）越南漢喃研究院蔵　AC一六六　AC五三〇　及びフランスアジア学会所蔵　Paris SA PD　二三八八劉春銀等編『越南漢喃文献目録提要』（中央研究院中国文哲研究所　二〇〇二）五〇一頁、五〇五頁。

（5）京都大学付属図書館の蔵経書院文庫の内の一冊。藏／十六／フ／二　寛文十一年（一六七一）中尾市良兵衛刊本。但し鎌倉時代中期の高山寺『法鼓台聖教目録』第二に「佛頂心陀羅尼經一巻」の書名が見えるため（『高山寺経蔵古目録』〈東京大学出版会一九八五〉一五六頁）、少なくともこの時期には招来されていたことが分かる。

（6）ベルリントルファン文献センター及びロシア科学院東方学研究所サンクトペテルブルク分院分蔵。牛汝極『回鶻仏教文献・回鶻漢訳疑偽仏経』（新疆大学出版社　二〇〇〇）に解説がある。

（7）Eric Grinstead `The Tangut Tripitaka、(New Delhi Sharada Rani 序文は一九七一・刊行年は記載なし）No.9所収のものや天理図書館所蔵本、ロシア科学院東方学研究所サンクトペテルブルク分院蔵のもの。

（8）西田龍雄『西夏王国の言語と文化』（岩波書店　一九九七）所収「西夏語仏典について」（四五四頁）参照。Eric Grinstead `The Tangut Tripitaka、No. 九の写本に対応。

（9）大正大蔵経第二十冊八十三頁b～九十六頁b

（10）大正大蔵経第二十冊九十六頁b～一〇三頁c

（11）陳燕珠『房山石経中遼末興金代刻経之研究』（覚苑出版社　一九九五）　五七三～五七四頁。

（12）縮刷版（大東出版社　一九九九）、『千眼』が6－三二〇頁、『千手』が6－三二五頁。

（13）鎌田茂雄『中国仏教史辞典』（東京堂出版　一九八一）「菩提流志」の項（三六二項）によると、唐高宗の永淳二年（六八三）に皇帝から招かれて来唐、開元十五年（七二七）に没したとある。

（14）胡孚琛主編『中華道教大辞典』（中国社会科学出版社出版　一九九五）「符水治病」（六三一頁）を参照のこと。符呪を書いた紙を水で飲んで病を治療する行為であり、後漢末、太平道の教祖である張角によって始められ、後世の道教において体系づけられた。病や症状によって使用する符呪は細分化されている。

（15）『中国古典文学与文献学研究』第四輯所収三七五～四〇一頁。

（16）①潤州の王奐之書のもの（朱長文『墨池編』巻六及び鄭樵『通志』巻七三）②洛陽香山寺の牛僧孺隷書のもの（同）③英徳府洽光県開元寺のもの（王象之『輿地碑記目』巻三「英徳府碑記」）の三種。

（17）なお第四話の類話については、楊宝玉が更に『敦煌本仏教霊験記校注並研究』（甘粛人民出版社　二〇〇九）において、『永楽大典』巻七五四三所収の釈延寿撰『金剛証験賦』にある故事を挙げている（実際は『金剛証験賦』本文ではなく『永楽大典』に収録された際につけられた注の中に見える話である。『永楽大典』より先の出所は辿れないので、『仏頂心陀羅尼経』の話がもとになって作られた話である可能性は否めない）。

（18）例えば二〇〇七年泰安岱廟で得た『仏灯』は、偽薬を売った者や農薬が残った野菜を売った者、悪徳公安局長といった悪人らが、死後地獄に堕ちるなどの報いをうける因果応報故事七編を収める。政治的にきわどい内容のためか、寄進者などの名前は無い。また二〇〇八年徐州の市街地の寺の門前にあった仏具店で得た『報応故事』（慈恵公徳会印贈　民国八十五年〈一九九六〉）は、台湾からもたらされたもので、肉食や動物虐待をした者が報いを受ける話を多く収める。二〇一二年に台北城隍廟で得た『世界奇事集』（慈心文化中心印贈）は病気にまつわる不思議な話を多く収める。少なくとも台湾の場合は、「慈恵公徳会」や「慈心文化中心」のような組織が寄付を集めて経典を印刷するシステムになっているようである。

(19) 牧田前掲書。二九～三〇頁。
(20) 『九天生神章経』のこと。『道蔵』洞玄部一六五
(21) 「那薛姑子和王姑子兩個、在印經處爭分錢不平、又使性兒、彼此互相揭調。」（五十九回）
(22) 八十六～七頁。出土場所は湖南省郴県鳳凰山の北宋期の古磚塔跡。
(23) 『浙江省博物館典蔵大系　東方仏光』（浙江古籍出版社　二〇〇八）　一四七～八頁
(24) この部分は簡体字の「发」に似た字が入るが、不詳。
(25) この碑文は、注1で挙げた拙稿「鬼討債説話の成立と展開―我が子が債鬼であることの発見―」でも取り上げたが、読み方を一部修正した。
(26) 『浙江省博物館典蔵大系　東方仏光』（浙江古籍出版社　二〇〇八）　一四九～五〇頁。
(27) 鄭阿財前掲論文二八頁。
(28) 嘉靖二十年に冊立された「徳妃張氏」と思われる（『明史』巻五十四礼志八に見える）。『明謚紀彙編』巻七に「栄昭　世廟徳妃張氏　隆慶」とあり、隆慶年間（一五六七～七二）に「栄昭」という謚を賜っていることがわかる。
(29) 「大明徳妃張氏謹發誠心喜捨資材命工印造／佛頂心陀羅尼経一千卷／王靈官真経一千卷散施／十方流通讀誦專保／眇躬清吉康泰謹意虔誠／嘉靖三十六年七月吉日」が録文であり、具体的に何を祈願したのかは不明。皇帝の妃の名による印刷であるが、皺のよった紙に印刷され、かすれが目立つ。字も庶民の発願によるものと比べて特に美しい訳ではない。どのような経緯で印刷されたのか、まだ研究の余地がある版本である。
(30) 「考妣」の二字は横に並べられている。同じ行の「王馮」の二字も同じ。
(31) 東京大学東洋文化研究所倉石文庫蔵。
(32) 世界聖典刊行協会　一九三三。
(33) 平凡社　一九八八。
(34) 閻鳳梧主編。山西古籍出版社　二〇〇二。
(35) 誰にとっての女婿なのか不明。

(36) 「力」の下に「日」。
(37) 『石刻史料新編』（新文豊出版公司　一九七七）二十六冊所収。
(38) 『石刻史料新編』（新文豊出版公司　一九七七）二十七・八冊所収。
(39) 梵字のような字が見える。
(40) 「焉」の下半分のみ。
(41) 滋賀秀三『中国家族法の原理』（創文社　一九七六）第四章第三節の一「女性と祭祀」（四五九～四六五頁）による。
(42) 「宣説」は大勢の人に宣伝して教え聴かせることである。『仏頂心陀羅尼経』は、もろもろの仏が説くようにその不可思議が塵をうるおすように影が覆うように功徳を及ぼし、信じる者は皆天に生まれることを得る、というのである。
(43) この石刻について詳しくは陳燕珠『房山石経中遼末與金代刻経之研究』（覚苑出版社　一九九五）五七三～五七四頁。を参照のこと。図版は中国仏教協会編『房山石経』二十二（中国仏教図書文物館　一九九一）六一七～六二〇頁及び六二三～六二六頁。
(44) 旁は「賣」であるが、偏が判読不能。
(45) 中国仏教図書文物館編『法源寺』（法源寺流通処　一九八一）「法源寺貞石録」所収　六七頁。
(46) 陳述『全遼文』（中華書局　一九八二）巻九　二三〇頁。「奉爲先祖耶耶娘娘」という語句があることから、父母と先祖の供養のために建てられたことが分かるが、供養者の名前を列挙した部分は欠けているようである。
(47) 雑劇『崔府君断冤家』が唯一の例外である。この戯曲では張善友の妻が夫の知らないところで勧進僧の銀を横領し、そのために張善友が討債鬼の息子を持つことになる。

附　『仏頂心陀羅尼経』の主なテキスト

敦煌本

『觀世音菩薩救難神驗經』P．三二三六　パリ国立図書館蔵

『佛頂心觀世音經』P．三九一六　パリ国立図書館蔵

宋本

『佛頂心觀世音菩薩大陀羅尼經』（嘉祐八年〈一〇六三〉）※『文物』一九五九年第一〇期「文物工作報導」（本文2―①）

『佛頂心觀世音菩薩大陀羅尼輪經』〇四九二七（崇寧元年〈一一〇二〉）北京国家図書館蔵

『佛頂心大陀羅尼經』一六〇一八　北京国家図書館蔵

『佛頂心陀羅尼經』一六〇九五　北京国家図書館蔵

『佛頂心陀羅尼經』八二二三八二五（紹興四年〈一一三四〉）上海図書館蔵（抄本）

『南宋佛頂心陁羅尼經』（乾道八年〈一一七二〉）浙江省博物館蔵（本文2―②）

遼本

『佛頂心觀世音陀羅尼残經幢』北京八一四（重熙十二年〈一〇四三〉）石は法源寺、拓本は北京国家図書館蔵

『佛頂心觀世音菩薩大陀羅尼經』甲　※応県木塔出土本

『佛頂心觀世音菩薩大陀羅尼經』乙　※応県木塔出土本

金本

『佛頂心觀世音菩薩大陁羅尼經』塔下八九六九・八九五九・八九七〇・八九五八（皇統三年〈一一四三〉）※房山石刻

『佛頂心觀世音菩薩大陁羅尼經』塔下七六〇五・六八四七・七六〇三・七六〇二　※房山石刻

『金大佛寺經幢』（T六一三．六三／四〇二四）（大定二十三年〈一一八三〉）傅斯年図書館蔵（北京図書館蔵「李温陀羅尼経幢」葉二三三　と同石よりの拓本）

『金陀羅尼經幢』（T六一三．六三／七三六七）（明昌二年〈一一九一〉）傅斯年図書館蔵（北京図書館蔵「任子琪建陀羅尼幢記」葉二四四　と同石よりの拓本）

『金觀音庵佛頂心陀羅尼經幢』（T六一三：六三／四六〇〇）（泰和元年〈一二〇一〉）傅斯年図書館蔵（北京図書館蔵「劉民壽塔幢」葉二五六　と同石よりの拓本）

『金佛頂心陀羅尼經幢』（T六一三：六三／二五一三）（大安二年〈一二一〇〉）傅斯年図書館蔵（北京図書館蔵「王建忠建陀羅尼経幢」各一〇二九九と同石よりの拓本）

『金昶公法師壽塔記』（T六五四：六三）（大安二年〈一二一〇〉）傅斯年図書館蔵（北京図書館蔵「思昶壽塔幢」葉二七一と同石よりの拓本）

『李興仁及僧妙浄建陀羅尼幢記』葉二四六（明昌三年〈一一九二〉）（北京図書館蔵）

『趙彦忠建石幢』葉二六五（泰和六年〈一二〇六〉）（北京図書館蔵）

『孫□哥建陀羅尼經幢』葉二二五（大定十七年〈一一七七〉）（北京図書館蔵）

西夏本

『佛頂心陀羅尼經』（西夏語）ロシア科学院東方学研究所サンクトペテルブルグ分院蔵

『佛頂心觀世音菩薩治病生□法經』（西夏語）同蔵

『佛頂心觀世音菩薩大陀羅尼經』（西夏語）同蔵

『佛頂心自在王陀羅尼經』（漢語）TK—一七四　同蔵

Or.一一三八〇—二一〇二RV（K：K：Ⅱ〇二四三：e）（西夏語）大英博物館蔵（スタイン本）

Or.一一三八〇—三〇二五（K：K：Ⅱ〇二四三：b）（西夏語）大英博物館蔵（スタイン本）

天理図書館蔵二種。

Eric Grinstead『The Tangut Tripitaka』No.九所収二種。

ウイグル本

残片多数　ベルリン 吐魯番文献中心及びロシア科学院東方学研究所サンクトペテルブルク分院に分蔵

元本

『佛頂心大陀羅尼經』　浙江省博物館蔵

明本

『佛頂心觀世音菩薩大陀羅尼經』故佛〇〇〇四一九　台湾故宮博物院蔵

『佛頂心大陀羅尼經』〇九三：二／六（嘉靖三十六年〈一五五七〉）佛教大学図書館蔵

『佛頂心大陀羅尼經』（正統五年〈一四四〇〉）米国インディアナポリス博物館蔵

清（民国）本

『佛頂心經三卷』特七八一三　東京都立図書館蔵（本文2―③）

朝鮮本

『佛頂心陀羅尼經三卷』国会 東京 い-七一　国会図書館蔵

『佛頂心陀羅尼經三卷』C四〇-一七五二 阿　東京大学総合図書館蔵

『佛頂心觀世音菩薩大陀（羅）尼經』四五五八　東京大学小倉文庫

『佛頂心陀羅尼經』四三四九　東京大学小倉文庫

『佛頂心經』〇九三：九／六／八一　佛教大学図書館

など多数。

ベトナム本

『佛頂心經』AC一六六　越南漢喃研究院蔵

『佛頂心經』AC五三〇　越南漢喃研究院蔵

『佛頂心經』Paris　SA　PD　二三八八　フランスアジア学会所蔵

和刻本

『佛頂心陀羅尼經三巻』蔵／十六／フ／二（寛文十一年〈一六七一〉）　京都大学付属図書館蔵

朝代不明

『佛頂心觀世音呪殘石』T六一三／二五一三　傅斯年図書館蔵

記録のみが残るもの

『佛頂心陁羅尼經』潤州の王奐之書のもの（朱長文『墨池編』巻六・鄭樵『通志』巻七三）

『佛頂心陁羅尼經』洛陽の牛僧孺隷書のもの（鄭樵『通志』巻七三）

『佛頂心經』英徳府洽光県開元寺のもの（王象之『輿地碑記目』巻三「英徳府碑記」）

『佛頂心陀羅尼經一巻』（高山寺『法鼓台聖教目録』第二）

『鄭□造陁羅尼幢記　大安二年』（陳述輯校『全遼文』巻九　中華書局　一九八二　二三〇頁）